

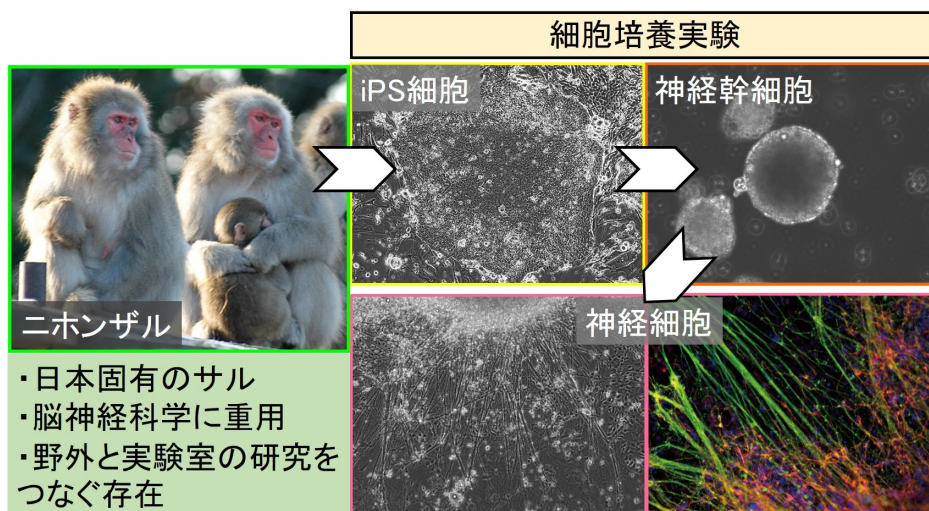
# iPS細胞 × 霊長類学で広がる研究

今村 公紀(京都大学霊長類研究所・ゲノム細胞研究部門)

日本の霊長類学には60年近い歴史があり、それはニホンザルの研究から始まりました。そのため、ニホンザルの特性について野外と実験室の両方から多くの研究成果が蓄積されてきましたが、「ニホンザルの特性がどのように形成されるのか」という問いへの発生生物学的な理解や分子メカニズムの解明は追い付いていません。

一方、iPS細胞といえば再生医療や創薬が連想されますが、iPS細胞の可能性は医療分野に限られません。iPS細胞を利用すれば、細胞運命や遺伝子機能の研究を培養細胞レベルで実施でき、かつ省スペースで、半永久的に、生きた状態で遺伝子資源を保存することが可能です。そのため、iPS細胞は遺伝子や細胞の視点から掘り下げた研究を行うための強力なツールになると考えられます。

現在、私たちを含む細胞の研究者が、霊長類iPS細胞を使ったヒト発生進化の研究に取り組んでいます。iPS細胞という技術を活用することで、21世紀型の新しい霊長類学や進化研究が切り拓かれようとしています。



京都大学霊長類研究所 助教(医学博士)  
 「将来は地元で県庁職員になるかな」と漠然と考えていた富山の高校生は、金沢大で生命科学の面白さを知り、大学教員を志す(-2003年)。特にES細胞の謎に心を惹かれ、大学院では当時無名の若手だった山中伸弥ラボの扉を叩き、奈良先端大(-2005年)、京都大医学研究科、三菱化学生命科学研究所(-2009年)で修行。学位所得後も滋賀医科大(-2010年)、慶應大医学部(-2013年)と医学畑に籍を置くも、オリジナリティと初心を求めて霊長研に移る。「iPS細胞と進化」をテーマに掲げ奮闘中。